

「走れメロス」素材考

1

太宰治がある時期、ドイツの詩人・シラーに傾倒していたことは、よく知られている。彼が大学生にむけて「諸君は今こそシルレルを思ひ出し、これを愛読するがよい。」⁽¹⁾と書いたのは、昭和十五年初頭のことであった。時代は戦争への傾斜を強め、日独防共協定（昭和十一年十一月）・日独伊三国軍事同盟（昭和十五年五月）の成立をうけて、ドイツ文学の翻訳も盛んになりはじめた頃である。シラーの翻訳を目録で探してみると、ちょうどこの時期に集中的に出版されていることが分かる。ちなみに、『シラー選集』⁽²⁾の刊行は昭和十六年のことである。このような状況の中で、太宰は、シラーの作品に題材をとった一篇の物語を書いている。末尾に（古伝説とシルレルの詩から）と書かれた「走れメロス」がそれである。

さて、「走れメロス」の素材となったシラーの作品は、「担保」（原題“Die Bürgschaft”）で、全二十連百二十行におよぶ譚詩である。『シラー選集』第一巻にこの詩の翻訳を載せた木村謹治の解説によれば、シラーはこの詩を「ヒギンの物語集」に材を得て書き

たとのことである。この点について、亀井勝一郎は次のように書いている。

この詩の材料となったのはローマの著述家ヒギヌスの寓話であるという。それに依ると二人の朋友はメロスとゼリヌンティオスであるが、しかし、他の著述家に従えば、ダーモンとフィンティウスである。シルレルははじめ、この詩の第一節、第二行の初語を Möros としたが、後に Damon と改め、同時に表題の下に “Damonund Phintha” と付け加えたという。太宰は主人公の名前などは古伝説に従ったのだろう。⁽³⁾

つまり、亀井によれば、太宰は“Die Bürgschaft”成立の事情と古伝説の内容を知っていて、「走れメロス」を書いたことになる。この説を受けて、相馬正一氏は、

（太宰の場合は）「担保」を下敷きにした以上当然ダーモンとすべきであったのを、シルレルが最初メロス名を使ったことを古伝説との関係で知り、「走れメロス」としたものと思われる。この場合、木村謹治の「担保」解説掲載の『シラー選集』第一巻は太宰の「走れメロス」発表より一年後の刊行であるから、太宰はそ

高山 裕 行

の解説文を「走れメロス」執筆時点では読んでいないことになり。太宰は執筆に先立って、木村謹治もしくはその周辺の独文学者と接触があったのだろうか。それとも亀井勝一郎が素材の提供者であったのだろうか。今は疑問のままで伏せておく(4)。

と述べ、疑問符つきながらも、木村謹治と太宰との関係に注目している。ただ、この文章を読むかぎりでは、木村謹治の解説文中に「メロス」から「ダーモン」へと書きかえられたことが出ているように思われるが、実際には、そのようなことは一言も書かれていない。しかし、木村謹治の解説文では、「ダーモン」という名は使われず、「メロス」名が用いられているのである。そこに矛盾のあることは事実としても、この解説を読んで太宰が「メロス」名を用いたとは思われない。太宰が木村謹治と事前に接触したことがあったとしてもである。それとも、木村ないしは他の人物から、その由来を聞いたのだろうか。それを証明するものは何もない。

たしかに、木村謹治訳「担保」は「走れメロス」と表現上の類似も多く、そこに何らかの関連をみることができなくはない。しかし、相馬氏も指摘するように、木村訳が刊行されたのは「走れメロス」発表より一年後のことなのである。相馬氏の推論はかなり苦しいと言わねばなるまい。そこで、次のように考えてはどうか。

まず、三つの仮説をたててみる。第一の仮説は、ドイツ語原文に“Mörös”と“Danon”の二種類があるのではないかということ、第二の仮説は、日本語訳にも同じように「メロス」名と「ダーモン」名の二種類があり、それも「走れメロス」発表以前に「メロス」名を用いた訳があるのではないかということ、そして第三の仮説は、「メロス」名を用いた訳を下敷きとして太宰が「走れメロス」

を書いたのではないかということである。これらの仮説が証明されれば、太宰が「ダーモン」でなく「メロス」名を使った理由も解決するはずである。以下、これらの仮説の証明を試みることにする。

2

最初に、第一の仮説に挑戦しよう。ここではドイツ語原文にあたる必要があるが、私が参看しえたのは二種類である。過去の全てのドイツ語原文にあたるのが本道ではあるが、残念ながら、そこまでの力が私にはない。

それはさておき、二種類の原文の第一連第二行は、それぞれ次のようになっている。

“Mörös, den Dolch im Gewande; (5)

“Danon, den Dolch im Gewande; (6)

この引用からも分かる通り、ドイツ語原文二種類のうちの一つは“Danon”ではなく“Mörös”を用いているのである(7)。これらの原文では書誌的記述がはっきりしていないので、どうしてこのような違いが出てくるのかは、よく分からない。しかし、ドイツ語原文に「ダーモン」名と「メロス」名の二種類があることは事実であり、第一の仮説は、これで証明されたのである。

次に、第二の仮説——日本語訳に「メロス」名を用いているものがあるかどうかについて見ることにしよう。

翻訳文献目録により、「走れメロス」発表以前、つまり昭和十五年以前に刊行されたシラーの作品にあたってみたが、“Die Bürgerschatz”は単独の作品としては掲載されていない。そこで詩集に絞って探してみると、昭和五年に小栗孝則訳『シラー詩集』(8)、昭和十

二年に同訳『新編シラー詩抄』⁽⁹⁾の二冊が刊行されていることが分かる。このほかに、大正二年に出された秋元蘆風訳『増補改版シルレル詩集』⁽¹⁰⁾が手元にあったので、この三冊を比較してみたい。

(A) 秋元蘆風訳

題名は「保証」、副題(ダーモンとフィンティアス)。第一連第二行は、「ダーモン、暴主に忍び寄りぬ。」となっている。

(B) 小栗孝則訳『シラー詩集』

この詩集は、編年体の形式をとっているが、該当する作品は収録されていない。

(C) 小栗孝則訳『新編シラー詩抄』

題名は「人質」、副題は「譚詩」。問題の箇所は、「メロス」は短剣をふところにして忍びよつた(傍点引用者)となっている。

このように、日本語訳にも「メロス」名を用いたものがある。それも、「走れメロス」発表の三年も前にである。これによって、第二の仮説も証明された訳である。

さて、この『新編シラー詩抄』は、現在でも、国立国会図書館で容易に閲覧できるのであるが、相馬氏をはじめ、諸氏は何故これを見落しているのであろう。ひょっとすると、太宰がこの本を読んでいるという確信でもあるのだろうか。そこで、第三の仮説——太宰が『新編シラー詩抄』を読んでいるということの証明にはいりた。これが証明できれば、太宰が「メロス」名を用いたことに対する疑問も一挙に氷解するからである。

3

前節であきらかになったように、小栗孝則訳『新編シラー詩抄』

では、他の訳と異なり「メロス」名が使用されている。出版されたのは昭和十二年、しかも改造文庫という普及版でもあり、太宰治がこの書を読んだという可能性は高い。ひとの文章を自分の作品に巧みにとりこむ太宰のことだ、もし読んでいるとすれば、両者の間に類似した点が見出せるはずである。そこで、両者の比較をおこなうことにしよう。一行一行見ても意味がないので、特によく似ている表現だけをとりあげることにする。なお、相馬正一氏は木村謹治との関係も問題にされているので、木村謹治訳も共に掲げることにする。略号は、(A)小栗孝則訳「人質」、(B)太宰治「走れメロス」⁽¹¹⁾、(C)木村謹治訳「担保」⁽¹²⁾である。

原詩 第二連第二行——第四行

(A) 命乞ひなどは決してしない／ただ情けをかけたいつもりなら／三日間の日限をあたへてほしい

(B) 命乞ひなど決してしない。ただ、(中略)私に情けをかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与へて下さい。

(C) 命乞ひはしない、／尤も情けをかけてくれるつもりなら／三日間の猶予を与へてほしい、

原詩 第三連第一行

原詩 第六連第二行

(A) それを聞きながら王は残酷な気持で北叟笑んだ

(B) それを聞いて王は、残酷な気持で、そっと北叟笑んだ。

(C) それを聞くと王は奸策をいだきながら北叟笑んだ、

原詩 第六連第二行

(A) 山の水源地は氾濫し

(B) 山の水源地は氾濫し

(C) 水は山から滝のやうに流れ落ち、

原詩 第七連全

(A) 彼は茫然と、立ちすくんだ／あちこちと眺めまわし／また声をかぎりに呼びたててみたが／繋舟は残らず波はれて影なく／目ざす対岸に運んでくれる／渡守りの姿もどこにもない／流れは荒々しく海のやうになつた

(B) 彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、繋舟は残らず浪に波はれて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよふくれ上り、海のやうになつている。

(C) 取りつく島もなく茫然と岸べに彼は佇んだ。——／あちこちと眺め廻し、／声を限りに叫んで見ても／無難な岸から目ざす陸地へ／小舟の纜を解かうとするものなく／渡舟を操る船頭も姿を見せず、／激浪はやがて海のやうになつて来た。

原詩 第八連全

(A) 彼は河岸にうづくまり、泣きながら／ゼウスに手をあげて哀願した／「ああ、鎮めたまへ、荒れくるふ波を！／時は刻々に過ぎてゆきます、太陽もすでに／真昼時です、(以下略)」

(B) メロスは川岸にうづくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。「ああ、鎮めたまへ、荒れ狂ふ流れを！時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。(以下略)」

(C) そこで彼は岸にうづくまり、泣きながら／ツォイスに手をあげて哀願した／「ああ、荒れ狂ふ流を堰き止めて下さい！／時間は刻々に過ぎて行き、太陽は／真昼時です。(以下略)」

原詩 第二十連第二行——

(A) 「おまへらの望みは叶つたぞ／おまへらはわしの心に勝つたの

だ／信実とは決して空虚な妄想ではなかつた／どうかわしも仲間に入れてくれまいか／どうかわしの願ひを聞き入れて／おまへらの仲間の一人にしてほしい」

(B) 「お前らの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへらの仲間の一人にしてほしい。」

(C) 「お前らは成功したのだ、／お前らはわしの心に克つたのだ、／誠実とは、決して空虚な妄想ではなかつた——／さればじゃ、わしも仲間に入れてくれ。／どうかわしの願ひを聞き入れて／お前らの仲間にも加へてくれ。」

以上、六ヶ所にわたって比較対照させながら引用した訳であるが、表現上の類似点はこれだけではない。原詩第一連第六行、第九連第二行・第三行・第七行、第十四連第七行、第十五連第二行、第十八連第六行・第七行——ざっと見ただけでも、これだけの箇所にも、類似点というよりそっくり同じといってよい表現を見出すことができる。実に、原詩百四十行の小栗訳中約四分の一にのぼる部分で、「走れメロス」の中にそっくり同じ表現で出てくるのである。これは驚異というほかない。

小栗訳を見る前、木村謹治訳を読んで、その表現が「走れメロス」によく似ているので驚いたことがあったが、小栗訳との似かたはその比ではない。まるで、太宰治が小栗訳を剽窃したかのようである。最後の場面などは、句読点の打ち方が違うだけで全く同じ表現になっている。これは、何を意味するのだろうか。

すでに記しておいたように、小栗孝則訳『新編シラー詩抄』が出版されたのは昭和十二年、「走れメロス」より三年も前のことである。このことからしても、小栗孝則が太宰の文章を真似たことは全く考えられない。しかも、小栗訳の出された頃から、太宰はシラーに傾倒しはじめていた。したがって、この『新編シラー詩抄』にも目を通したであろうことは、十分に考えられる。前節で実証したように、両者の表現上の類似点は余りにも多い。意識して書いたのであれば、決してこのような似たかたはしないはずである。こう考えれば、「走れメロス」を書くにあたって太宰が下敷に用いたのが、小栗孝則訳「人質」であることは、ほぼ間違いないと思われる。小栗訳は主人公に「メロス」名を用いているので、太宰もまたその主人公を「メロス」としたのである。

これだけでも、第三の仮説はほぼ実証できたと思うが、他人の空似ということもある。表現上の類似点だけでなく、別の面から、第三の仮説の証明をおこなって、さらに確実なものにしたい。それは、「走れメロス」に登場する朋友セリヌンティウスについてである。

セリヌンティウスという名前は、小栗訳はもとより、木村謹治訳、手塚富雄訳^④にも全く出てこない。副題に「フィンチアス」という名前が出てくるだけである(もちろん小栗訳にはない)。独語版においても同様である。それでは、やはり太宰はその名を古伝説から採ったのであろうか。だとすると、小栗訳以外にも、「走れメロス」と似た表現をした何かがあったのかもしれないということにも

なりかねない。ところが、そうではないのである。

ここで、再び小栗訳「人質」を読み直してみよう。彼は文中で、「ディオニス」と「友達」の二つの言葉だけに注をつけている。巻末にまとめられた「註解」の中で、彼が、「この詩はイタリーの伝説中に材料をとつてゐる。」とし、又、「『友達』とは、伝説ではセリヌンティウス *Serimuntius* といふ名の男。」と記している点に注目してほしい。本文中では一度も出てこなかった名前が、巻末の「註解」にちゃんと出ているのである。

書物を読む時は誰でもそうであるが、「注」があれば必ずそれを読むものである。ましてや、翻訳ということになれば、なおさらである。知らない言葉も数多くあろう(ちなみに、太宰は仏文科中退であり、独語・独文に造詣が深かったとは考えられない)。当然のごとく、太宰も「註解」を読んだ。そこで、「人質」という詩が「イタリーの伝説」を題材としていること、又、「友達」の名が「セリヌンティウス」であることを知ったのである。

これによって、第三の仮説は完全に証明された。太宰はあきらかに小栗訳「人質」の収録された『新編シラー詩抄』を読んでいるのである。したがって、亀井勝一郎や相馬正一氏の見解は、全く根拠のない無意味なものとなってしまった訳である。

5

第一節で、わたしは三つの仮説を立てた。そして、それらは前節までに全て証明された。したがって、結論はひとつである。

太宰治が「走れメロス」を書くにあたって直接参考にしたのは、小栗孝則訳「人質」である。主人公の「メロス」という名も、親友

を「セリヌンテイウス」としたのも、全て小栗訳に基いているのである。したがって、太宰が古伝説を読んだか読まなかったか、又、それが何であるかは、「走れメロス」の素材を考えるうえで、さほど大きな意味をもたなくなる。さらに、相馬正一氏が疑問符付きで提起された、太宰治と木村謹治との関係、亀井勝一郎による素材の提供という見解は、全く考慮する必要がないであろう。そして、多々論じられた「メロス」の名の由来も、これで結論が出た訳である。

くり返すなら、太宰治が「走れメロス」の主人公を「メロス」としたのは、古伝説にそうあったからではない。また、シラーが最初「メロス」名を用いたことを何かで知った訳でもない。当時流布されていた小栗孝則訳『新編シラー詩抄』に収録された「人質」を読んだ太宰は、その中にある主人公「メロス」と友人「セリヌンテイウス」の名を、ちゃっかり拝借したにすぎないのである。

それにしても、両者の類似点は余りにも多い。現在なら、あきらかに盗作として問題化すると思われるが、当時は何も問題にならなかったのだろうか。そこまでの調査は、まだ出ていない。

注(1) 「心の王者」(昭和十五年一月) 引用は『太宰治全集』第十卷(筑摩書房版・昭和五十二年二月刊)による。

(2) 翻訳文献目録によれば、『シラー選集』は全五巻、昭和十六年から十九年にかけて、富山房より刊行されている。

(3) 『近代文学鑑賞講座』第十九巻(昭和三十四年五月、角川書店)

(4) 『走れメロス』の背景」(『太宰治』・昭和五十四年六月、津軽書房刊所収)

(5) 北九州大学図書館蔵。“BIBLIOTHEK DEUTSCHER KLAS-

SIKER”というシリーズに収録された“SCHILLERS WERKE”(Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1969)による。

(6) 北九州大学図書館蔵。“SCHILLERS WERKE”全四巻に収録。発行所・発行年月日は不明である。

(7) その後、九州大学教授清水孝純氏に御教示いただいた資料にも“Meros”名が用いられていた。

(8) 改造文庫第二部第六十篇・昭和五年六月十九日発行、改造社。全三百六十四頁。私が参看したのは、国立国会図書館蔵本である。註(9)も同じ。

(9) 改造文庫第二部第三百編・昭和十二年七月二十日発行、改造社。全四百七十七頁。

(10) 明治三十九年初版発行・大正二年十一月四日増補改版発行、東亜堂書房刊。全百九十三頁、巻末に独語原文が掲載されている。

(11) 「走れメロス」からの引用は、全て『太宰治全集』第三巻(昭和五十年十一月、筑摩書房刊)による。

(12) 「担保」からの引用は、全て『シラー選集』第一巻(昭和十六年二月、富山房刊)による。

(13) 筑摩書房版『世界文学大系・18』に収録。題は「人質(ダーモンとピンチアース)」である。

昭和六十年七月稿 (たかやま・ひろゆき/森田修学館)

会員のかたへ

事務局は原則として、月曜から金曜の10時～5時まで開いております。

お電話等は、なるべくこの時間内にお願ひします。